

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第807号 平成26年9月25日

オウンゴール（2）

福島第一原子力発電所事故に関する聴取結果書（吉田調書）のスクープ記事もまた、極めて「悪意」に満ちた記事だと思っています。「悪意」というのは、朝日新聞の記者には東京電力を批判する、貶めようという意図がまずあって、その意図に会うように吉田調書を料理したのではないかという事なのです。

朝日新聞は、5月20日、それまで非公開だった「吉田調書」を独自に入手したとしてスクープしました。その内容は、東日本大震災発生後の3月15日、福島第一原子力発電所にいた東京電力の社員等の9割に当たる約650人が、吉田所長の命令に違反して10キロ南の福島第二原子力発電所に撤退した、というものです。

しかし、現実には、吉田所長に対する命令違反はなかったし、撤退という組織的な職場放棄もなかった事は、その後公開された吉田調書で明らかとなっています。

朝日新聞の記事が掲載された直後、韓国の国民日報が「現場責任者の命令を破って脱出したという主張が提起されて、日本版の“セウォル号事件”として注目されている」と報道したという話を聞くと、朝日新聞の報道の影響の大きさを改めて認識させられますし、当時命がけで事故対策に当たっていた社員の気持ちを思うと、やり切れなさが募ります。

朝日新聞は、「記者の思い込みやチェック不足等が重なった」としていますが、そもそも、記事にするについて怠ってはならない裏付け取材をここでもしておらず、いくら意図的でなかったと弁明されても、その事を額面通りに受け取るのは難しいように思います。

特に、8月18日の段階で産経新聞が、朝日新聞の「命令に違反して撤退」の記事は誤報であると指摘していたにもかかわらず、

検証結果を明らかにせず、結局、政府が吉田調書の全面公開を行った当日に社長が会見して誤報を認めるという流れを見ると、対応の遅さが目に余ります。

勿論、朝日新聞の誤報は論外としても、だからといって東京電力の対応に問題がなかったかといえばそんな事は全くありません。

朝日新聞の誤報によって、福島第一原子力発電所の事故に関する事実の解明が疎かにならぬよう願っています。

毎月最終金曜日に掲載していた池上彰氏のコラム「池上彰の新聞ななめ読み」について、8月分として掲載予定だったコラムの掲載を拒否したという問題は、朝日

新聞の醜態を際立たせる結果となりました。

このコラムは、朝日新聞が従軍慰安婦報道の検証に対する姿勢を、「訂正、遅きに失した」と批判する内容だった事から、朝日新聞側が過敏に反応した結果だろうと思いますが、掲載を拒否した事に批判が集まると、今度は一転して掲載するというドタバタぶりで、まさにオウンゴールといってもいい状況に陥っています。

朝日新聞の一連の問題は、池上彰氏がコラムの中で「新聞記者は事実の前に謙虚であるべきだ（9月4日付朝日新聞から）」と指摘していますが、そのマスコミとしての原点ともいうべき一番大事なところが置き忘れられて来た事に原因があるのではないのでしょうか。

私が道庁職員だった時代、マスコミから様々取材を受けましたが、結局、私の発言も「記者の意図に合うように一部だけが切り取られて使われた」と感じる事がしばしばありました。ですから、マスコミの方々をお願いしたい事は、予断を持たず、事実をしっかりと報道して欲しいという事に尽きます。

朝日に対する批判に関連して、月刊「創」編集長の篠田博之氏は、北海道新聞の「週刊誌を読む」欄で、「深刻なのは、これが一新聞社の問題にとどまらず、日本の言論界全体に影響を及ぼす可能性が高い事だ。朝日を攻撃している週刊誌には「国賊」「売国奴」などという言葉が躍っている。これらはかつて、国家の方針に従わない原論を封殺するのに使われた言葉だ。それが今や、ためらいもなくメディアに使われている（9月10日付北海道新聞から）。

今も、これからも、マスコミが国家権力に擦りより、国家権力の代弁者になってはならないというのは、当然です。

「売国奴」等といった批判を恐れて筆が鈍るようなら、マスコミの看板は捨てた方が良くと思います。勿論、だからといって、権力批判なら誤報でも許される、という甘い考えは持つべきではありません。マスコミにとって誤報は、自ら相手に攻撃の材料を与えるようなものです。批判者に対する最大の防御は、事実に基づいているという事だと思えます。つまり、事実こそ最も強力な力があると、私は信じています。だから、記者は、事実を肉薄する事に労を惜しむべきではありません。

こうした中、朝日新聞は9月14日、2012年（平成24年）6月に掲載した任天堂の岩田社長のインタビュー記事について、本当はホームページから引用したにもかかわらず、あたかもインタビューしたかのような体裁で記事にしていたとの、お詫びの記事を掲載しました。

こうなると、事実を軽視し、弄ぶのは朝日新聞記者の体質ではないのかと疑いたくもなります。

私は、朝日新聞の再生を願っている一人ですが、小手先の改善では朝日新聞の再生はあり得ません。今こそイノベーションの力が問われているのだという事を、朝日新聞の関係者には肝に銘じていただきたいと思っています。（塾頭：吉田 洋一）